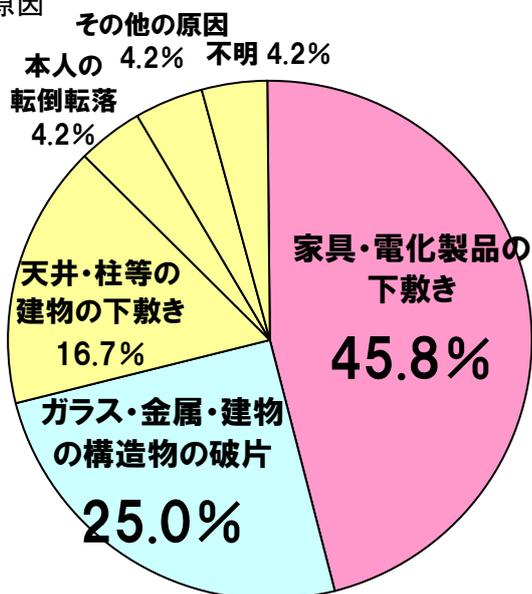


1. 震災の負傷原因

阪神・淡路大震災の負傷原因



- 出典／兵庫県宝塚市、川西市、および西宮市の一部地域の120世帯とその世帯員277人を対象として実施した調査
- 調査期間／1996年1月15日から2月22日の期間「阪神大震災による建造物の損壊と負傷に関する実態調査委員会より」

2. 揺れるまでの猶予時間で怪我をしない確率の変化

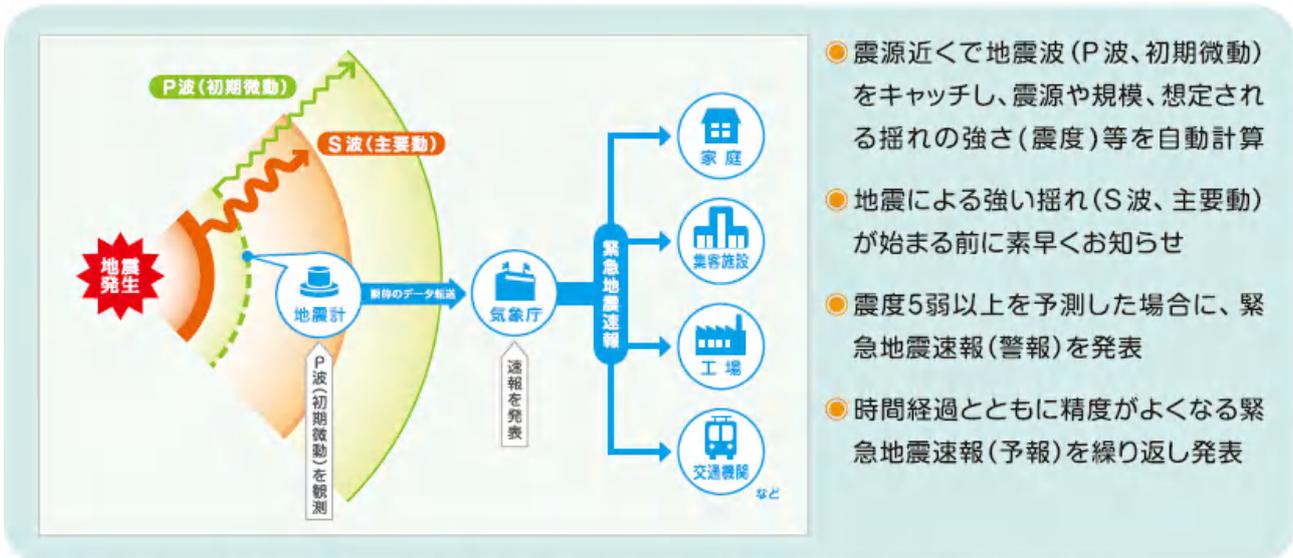
情報発信から到着まで5秒の猶予があった場合、死者を約80%減らすことができるという研究データがでています。

猶予時間	怪我をしない確率	行動
2秒	25%	地震の認識・行動の開始が可能な時間。わずかな時間だが、最低限の安全確保により致命的な怪我から回避できる。心構えができる。自動で機械制御が可能。
5秒	80%	学校における実証実験で訓練済みの生徒の100%が机の下にもぐれることが可能。心構えができる。
10秒	90%	10秒あれば命は助かるとの言葉から備えがあれば十分な避難行動が取ることができる。
20秒	95%	落ち着いて家族や周りの人々に声かけができ、身の安全が確保できる。安全な場所へ避難ができる。

- 猶予時間が0秒の場合、怪我をしない確率を0%とした場合の被害予測の研究データ。
- 出典/東京大学生産技術研究所目黒研究室レポート『緊急地震速報導入による社会へのインパクト』

3. 緊急地震速報までの流れ

緊急地震速報とは、地震の揺れの予報・警報です。緊急地震速報は地震の発生直後に、震源に近い地震計でとらえた観測データを素早く解析して、震源や地震の規模（マグニチュード）を推定し、これに基づいて各地での到達時刻や震度を予測し、可能な限り素早く知らせます。



※震源に近い地域では、緊急地震速報が強い揺れに間に合いません

※予測した震度には±1程度の誤差を伴います

※緊急地震速報（警報）を早いタイミングで発表できない場合があります

■気象庁ホームページより

【緊急地震速報機 動作の流れ】

- ①地震計がP波をとらえる
- ②気象庁が地震の規模や到達するまでの時間を予測し発表
- ③各FM局が緊急地震速報を放送
- ④本機が報知音を感知して緊急地震速報を流す

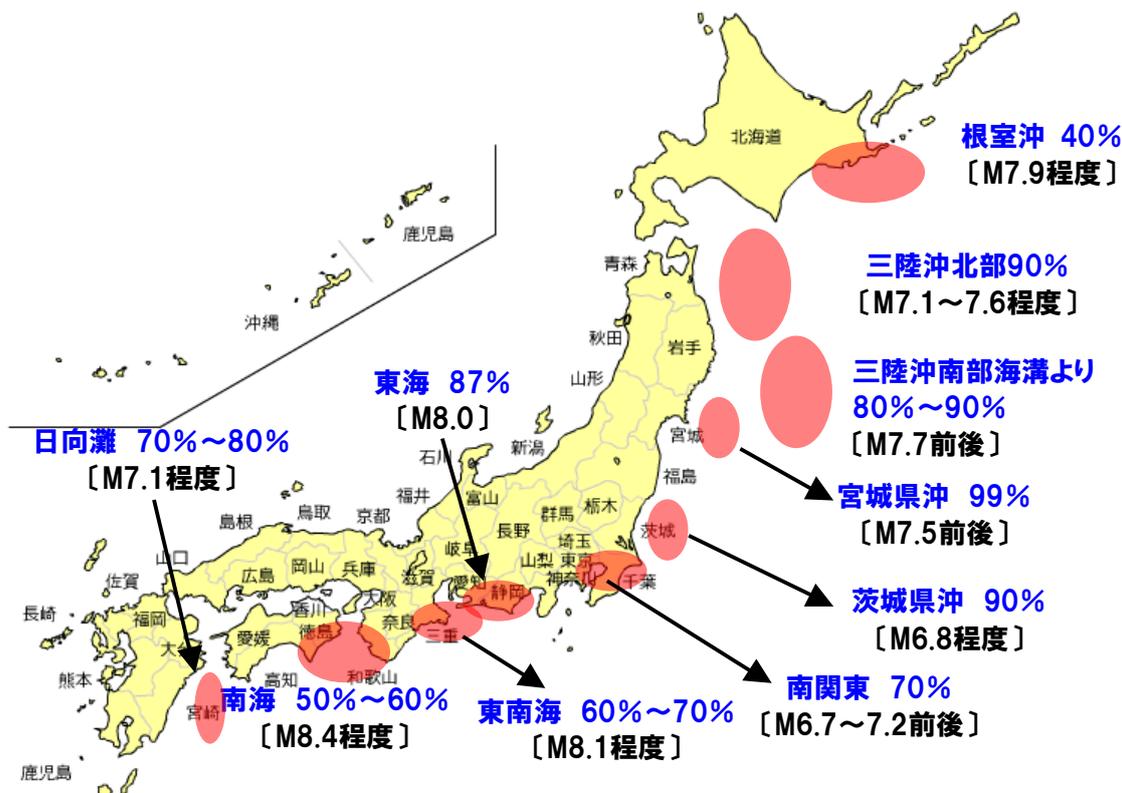


4. 国内の大きな地震事例

発生年月日	M	地震名	人的被害	最大震度
1995年1月17日	7.3	阪神・淡路大震災	死 6,434 不明 3	7
2000年10月6日	7.3	鳥取県西部地震	負 182	6強
2001年3月24日	6.7	芸予地震	死 2 負 288	6弱
2003年9月26日	8.0	十勝沖地震	死 1 不明 1 負 849	6弱
2004年10月23日	6.8	新潟県中越地震	死 68、負 4,805	7
2007年3月25日	6.9	能登半島地震	死 1 負 356	6強
2007年7月16日	6.8	新潟県中越沖地震	死 15 負 2,346	6強
2008年6月14日	7.2	岩手・宮城内陸地震	死 13 不明 10 負 451	6強
2009年8月11日	6.5	駿河湾の地震	—	6弱

※ 駿河湾で起きた地震については初期段階での情報です。

5. 今後30年以内に震度5弱以上の地震が起こる地域(2009年1月1日起点)



■地震調査研究委員会による「全国地震動予測地図 確率論的地震動予測地図：確率の分布 地図編・解説編」より